

中学校

光村ポケット 道徳

● 誰もが参加できる ●
道徳科授業の
ために

発達障害のある児童生徒に
配慮したい言葉



坂井聡先生

香川大学教授／香川大学教育学部
附属特別支援学校 校長
障害児の教育方法、障害児のコミュニ
ケーション指導を専門とする。

LINE公式アカウント友だち募集中!



授業づくりに役立つ情報を、
いち早くお届けします。



光村図書

教授用資料 本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

発達障害のある児童生徒に配慮したい言葉

発達障害等がある子どもによく見られることなのですが、言葉を字義通りに取ってしまうために、教師の意図がうまく伝わらないことがあります。へりくつを言っているのではなく、その子どもなりに一生懸命に考えたことなのです。指導する教師は、その子どもの気質を理解してその意味を伝えていかなければなりません。

そこで、ここでは、道徳科の授業の中でよく使われる言葉で、発達障害のある子どもには理解しにくいと思われる言葉や、注意して使わなければならない言葉を取り上げて、指導するときの配慮を考えたいと思います。ここに挙げた言葉は、私がこれまで言語聴覚士、公認心理師として病院等で子どもたちの相談に乗ってきた経験の中で、記録していたものからピックアップしたもので、研究で得られた成果から導き出されたものではありません。

しかし、実際に理解できずに困っている子どもからの情報なので、このような子どもたちが教室にいる可能性があることを理解しておくことは重要だと思います。そして、そのような存在があることが理解できていれば、小・中学校で子どもの発言と、指導する教師の意図がずれている場合でも、共感的で肯定的で寛容な対応をすることができるはずです。それは、子どもが承認される経験になります。

学校生活で子どもを傷つけないこと、これが基本です。



使用の際に注意したい言葉 一覧

あ	明るい○○	こ	心が動く	し	親切にする	ほ	朗らか
	諦めないでやり抜く		心がける	す	好き嫌いをしない	ま	真心をもって接する
い	いい気（になる）		心が満たされる		すごい		む
	生きている仲間		心から謝る	素直な心で○○する		胸が痛む	
	一生懸命		心に感じる	た		正しいと思うことを行う	
	一生忘れない		心に残る		誰に対しても同じように○○する	胸がときめく	
	命を大切にする		心を込める	ち	ちょうどよい生活	め	
う	美しい心	し	したほうがよいと思ったら○○	と	友達	や	優しくする
お	思いやり		自分のことが好き	な	仲よく	よ	やればできる
か	がんばる		自分らしさ	ね	願いを込める		よいことをする
き	きまりよい生活		自由に	ひ	（○○が）光る		よくできた
	気持ちよい○○		正直な心		ひたむき		
こ	心が温かくなる		正直に謝る			人当たりがいい	

明るい○○

明るい心、明るい性格、明るい人など。

性格や表情、雰囲気などが朗らかである。陽気だ、明朗だ、というようなことを表す表現です。

子どもの中には、明るくできないと思っている子もいます。性格や表情は明るいほうがよいと教えてしまうと、明るくできない子どもの場合、自分を責めることにつながる場合があります。

性格や表情、雰囲気などを朗らかにできないタイプの子どものいることを理解しておく必要があり、性格や表情を明るくできなくても大丈夫であることを伝えることが重要です。

諦めないでやり抜く

目標に対して情熱をもってひたむきに取り組み、困難や挫折を味わっても諦めずに、粘り強く努力し続けることを指す表現です。

主流といわれる人たちには簡単にできてしまうことでも、発達障害のある子どもには、努力してもできないことがたくさんあります。努力してもできないことに対して、「諦めないでやり抜く」を実践しようとする、できない自分を責めたり、できない自分には価値がないと考えたりすることがあり、その結果、自己肯定感が下がってしまうことがあります。諦めることがあってもよいと伝える必要があります。

いい気（になる）

「いい気」とは、自分の欠点などに気づかないで、得意になっていること。独りよがりで他人を気にしないことを表す言葉ですが、発達障害がある子どもたちの中には、「よい＋気」と考えてしまい、よい言葉だと勘違いする子がいます。正しい意味を、わかりやすく伝える必要があります。

生きている仲間

「命を大切に」ということを伝えるために、「生きている仲間を大切に」と表現することがあります。しかしいっぽうで、害虫を駆除することなどがあった場合、「生きている仲間なのに、なぜ」と考える子どもがいます。どう説明するかを考えておかねばなりません。人間である以上、人の命がいちばん大切であることは、常に教えておく必要があります。

一生懸命

全力で物事に取り組むということを表す言葉です。

「一生懸命に勉強をする」などの使われ方をします。この場合、目標に向かって全力で勉強に取り組むことを意味しますが、なかなかできるものではありません。日常的に使われる言葉ですが、発達障害のある子どもたちの中には、常に全力で取り組まなければならないと考えて、心身ともに疲れてしまう子がいることも理解しておかなければなりません。

一生忘れない

大切なことを忘れないという意味の表現ですが、字義通りに受け取らないよう注意が必要です。

特に、間違いや失敗などがあった場合に、「この失敗は一生忘れないようにしなければなりませんよ。」などと使ってしまうと、「一生覚えておけと言うのか。」と考えてしまい、突っかかってきたり、忘れることができなくて、いつまでも落ち込んでいたりすることがあります。たとえ話であり、忘れても大丈夫であることを伝える必要があります。

命を大切にする

命を大切にするのは重要なことです。しかしいっぽうで、害虫を駆除することもあり、どの命が大切なのか、理解できない場合があります。人間である以上、人の命がいちばん大切であることを伝える必要があります。

美しい心

人の心や態度が好ましく理想的であるようなときに使います。形があるものであれば、美しいということを理解しやすいと思いますが、心は形も色も音もないので、その美しさを伝えるのは難しいことです。「心が美しい」ということは、どういうことなのかをイメージできない子どもがいることを知って、対応する必要があります。

思いやり

他人の心を想像し、気を配ることを意味する言葉です。

発達障害のある子どもたちの中には、他人の心を想像することが苦手な子がいます。他人の心は見えないからです。そのような場合、「思いやり」と言われても、何を言っているのかが理解できません。気持ちや感情の程度などを数直線で表して、視覚化するなどの方法で伝えることが重要です。

がんばる

困難にくじけずに我慢してやり抜くことを意味することが多い言葉です。

学校や家庭には、困難にめげないで我慢する生活をしなければならぬと考えて、しんどくなっている子どもがいます。「がんばる」という言葉が、知らず知らずのうちに子どもを追いつめているかもしれません。

がんばりすぎると、苦しくてつらくなることもあるから、困難にくじけることがあっても大丈夫であると教える必要があります。これ以上がんばれないと思っている子どもがいることを忘れないようにすることが大切です。

きまりよい生活

「きまりよい」という言葉の意味は辞書などを引いても出てきません。道徳科では「きまりを守る生活」というように使われることが多いようです。規則正しくきまりを守る生活という意味であると考えられますが、きまりの中身は広く、人によっても考え方が違うものです。

発達障害のある子どもの場合、どのような生活なのかがイメージできなかったり、厳格にきまりを守ろうとしたりしてトラブルになることがあります。具体的にどのような生活をするのかなかをイメージできるように伝えることが重要です。また、時と場合によっては、きまりは守れないこともあるということを伝えるのも重要です。

気持ちよい〇〇

心身の状態がよいことや、考え方や行動が好ましいことを意味する表現です。

心身の状態のよさは、人によって違います。どんな考え方や行動を気持ちよく感じるかも、人によって違います。また、発達障害のある子どもたちの中には、感覚過敏である子も多くいます。その場合、主流といわれる人たちとは感じ方そのものが違ってくということを理解しておくことが重要です。主流といわれる人たちが気持ちよいと感じても、不快に感じる子どもがいるということです。

心が温かくなる

気持ちが穏やかになるさまを意味する表現です。発達障害のある子どもたちの中には、心という見えないものをイメージすることが苦手なために、この言葉の意味を理解することが難しい子がいます。どんな気持ちのときに「心が温かくなる」と言うのか、具体的な場面を使って指導する必要があります。

心が動く

「心が動く」とは、ある出来事や状況に対して感動したり感激したりする様子を表現する際に使われますが、発達障害のある子どもたちの中には、心は見えないのでイメージすることができない子がいます。具体的にイメージできるように伝える必要があります。

心がける

常に気に留めておくことや、忘れないようにすることを意味する言葉です。

発達障害のある子どもたちの中には、見えない心をイメージできないために、この言葉を理解できない子がいます。また、心がけているつもりでも忘れてしまうこともあり、その際、自分はだめな人間だと感じる子どももいます。常に気に留めておくことはできなくてよいということや、忘れることも大切であるということも指導する必要があります。

心が満たされる

「心が満たされる」とは、充実感や幸福感をもつさまを表す表現です。

発達障害のある子どもたちの中には、心という見えないものをイメージするのが苦手なために、この言葉の意味を理解できない子がいます。どのような状態のときに「心が満たされる」と言うのか、具体的な場面を使って指導する必要があります。

心から謝る

心を込めて謝ることを意味する表現です。発達障害のある子どもたちの中には、心を込めるということがイメージできないために、どのような謝り方のことなのか、理解できない子がいます。また、理解できていないがゆえに、発達障害のある子どもの謝り方には感情が籠もっていないように見えることがあり、それが本当に反省しているように見えないため、そこからトラブルが大きくなることがあります。

教師も、普段、自分は心から謝ることができているのかということ問うてみてください。心から謝ることは、簡単にできることではないと実感し、そのことを伝えるとよいでしょう。

心に感じる

心に残るような強い印象があるさまを指す表現です。

発達障害のある子どもたちの中には、見えない心がイメージできないので、「心に感じる」ということの意味が理解できない場合があります。「心に感じる」とは、どのような状況のことなのかをイメージできるように、指導する必要があります。

心に残る

感動や印象などが、後々まで忘れられないという意味の表現ですが、発達障害のある子どもたちの中には、心は見えないので、イメージすることができない子どもがいます。記憶されているということであると、説明する必要があります。

心を込める

思いやりの気持ちで、心の中をいっぱいにすることを表す表現です。

発達障害のある子どもたちの中には、思いやりの気持ちで心の中をいっぱいにするのをイメージできない子がいます。思いやりの気持ちをイメージできなければ、思いやりの気持ちで心の中をいっぱいにするというイメージもできないということです。具体的にどのような行動として表れるのか、伝える必要があります。

したほうがよいと思ったら〇〇

自分がしたほうがよいと思ったことは実行するというように使われます。

よく、「空気が読めない」と言われる人がいますが、その人は、その場の状況（文脈）が理解できず、「したほうがよいと思ったことをすぐにしてしまった」ために、そのような評価をされていると考えられます。クラスの子も全員が、同じように文脈（状況）を理解することはできないということを覚えておくことが重要です。

また、自分はしたほうがよいと思って、相手は不快に感じることもあります。一人一人、考え方、感じ方が違うということを伝えるのも必要です。

自分のことが好き

自分のことを好きになるというのは難しいことです。自分のことを好きになるためには、自己肯定感を高める必要があるでしょう。内閣府の調査「こども・若者の意識と生活に関する調査（令和4年度）」によると、「自分が好きだ」と肯定的に捉えている子どもが約8割いるとなっていますが、逆に考えると、残りの2割は「自分が好きだ」とは思えない子どもであるという意味で、配慮が必要であるということ忘れてはならないのです。

また、自己肯定感は女子児童生徒のほうが低い傾向が出ているので、この点についても配慮しながら授業を進めていく必要があるでしょう。クラスの中で承認される経験を積むことで、自分が必要とされていると感じることができるようなのです。

自分らしさ

「自分らしさ」とは、人それぞれ、異なる個性や性質を表す言葉です。

「自分らしさ」は、（生来もっていると考えられる）気質や経験、環境などによって影響を受けるものです。多くの人は、自分のこととなると、自分らしさとは何かかわらないと感じるでしょう。自分のことをありのままに受け入れるようにすることも重要です。

自由に

自分の心のままに行動できる状態を指す言葉です。しかし、授業等でこの言葉が使われる場合は、状況の範囲内で自由の幅を考えて行動することを意味していることがほとんどです。発達障害のある子どもたちの中には、今の状況を理解したり、教師が何を考えているのかを想像することが難しい子がいます。そのため、状況に当てはまらない行動をすることがありますが、反抗しているのではありません。字義通りに取ってしまったということなのです。自由の範囲をその状況に応じて説明する必要があります。

正直な心

うそ偽りのない心のことを意味する表現です。発達障害のある子どもの場合、うそ偽りは絶対にあってはならないと考えてしまうことがあります。そのため、うそを言ってしまった自分を責めすぎたり、他人の行動を厳しく指摘したりすることがあります。正直な心で指摘した結果なのですが、場合によっては他人を傷つけることにつながることもあります。

正直に謝る

自分の非を認め、うそ偽りなく謝るという意味があります。

自分が悪いと思っている場合は正直に謝ることは理解できますが、発達障害のある子どもたちの中には、自分が悪いと思っていない場合、「悪いとは思っていないけど、一応謝っておきます。」というように解釈してしまい、トラブルになることがあります。

まずは、「正直に謝る」ことは、誰でも可能なのか、教師もできているのかと問いながら指導する必要があります。

す。また、上記のようなことを考えている場合には、トラブルにならないように上手な謝り方を教える必要があります。発達障害があると、脳の情報処理のしかたが違うので、感じ方や解釈のしかたも違うということを意識しておくことが重要です。

親切にする

「親切にする」とは、相手の身になって、その人のために何かをすること。思いやりをもって人のために尽くすことを意味する表現です。

発達障害のある子どもたちの中には、想像することが苦手なために、相手の身になって考えることが難しい子もいます。親切にと思ってしたことが、トラブルになることもあります。正しいと思ってその人のためにしたことでもトラブルになると、原因がわからず落ち込んでしまう場合もあります。

主流といわれている人たちとは、感じ方や解釈のしかたが違うということを意識して指導する必要があります。

好き嫌いをしない

食材や食事の内容だけでなく、人に対しても使われる表現です。

好き嫌いの感情があること自体は自然なことなので、好き嫌いがあることはよくないという価値観にならないように指導することが大切です。「自分は何が好きなかわからない」となってしまうと困るからです。

また、偏食などがある発達障害のある子どもの場合、この言葉がその子を傷つけることがあるということも知っておく必要があります。好き嫌いはあるものだと教える必要があります。

すごい

程度が普通ではないことを表す言葉です。しかし、程度が普通であるかどうかは人によって基準が違うので、自分が置かれているその場の状況の中で判断する必要があります。また、自分や他者が置かれている状況をイメージできない場合、主流といわれている人たちと理解が隔たってしまうことがあります。それがきっかけでトラブルになることもあるので、基準は人によって違うということを教える必要があります。

素直な心で〇〇する

「素直な心で〇〇する」とは、自分自身がまだ至らないことを認め、だから努力するという謙虚な姿勢を指す表現です。これを実行しようとするなら、全てに対して学ぶ心

をもち、そこから何らかの教えを得ようとする謙虚さが必要でしょう。こう考えると、「素直な心で〇〇しなさい」は、とても難しいことを求める言葉であるとわかります。

全てに対して学ぶ心をもつことなど、簡単にできることではないでしょう。指導する教師は、子どもに対してとても困難なことを求めているということを理解して指導する必要があります。

正しいと思うことを行う

正しいと思うことは人によって違います。感じ方や考え方も人によって違います。その子どもが何を正しいと思っているのかを、教師が理解しておかないと、子どもが思っていることをそのまま実行してしまったために、トラブルになることがあります。

発達障害がある子どもの場合は、感じ方や解釈のしかたが主流といわれている人たちとは違うということを意識して、指導する必要があります。

誰に対しても同じように〇〇する

教師は、誰に対しても同じように接することができているでしょうか。そのようなことができる人は、なかなかいないと思われます。誰に対しても同じように接するのは難しいということを知ったうえで、授業を進める必要があるでしょう。

発達障害のある子どもたちの中には、字義通り、誰に対しても同じような態度を取らなければならないと考えている子がおり、不適切な対応をしてしまった結果、トラブルに巻き込まれることもあると考えられます。善悪の判断とも関連することがあると思われるので、字義通りに、誰に対しても同じように接することが難しい場合もあることを知らせるのは、とても重要なことです。

ちょうどよい生活

程度が過不足なくぴったりしている生活のことを表す表現です。道徳では、節度があり、無理なく、健康的な生活を指すことが多いのですが、自分にとって「ちょうどよい生活」というのは、人によって異なります。家庭環境によっても大きく左右されます。ちょうどよい生活は人によって異なること、一人一人に生活があって、それは他人と比較するようなことではないと教える必要があります。

友達

「友達」とは、互いに心を許し合っている人や、仲がよくて親しい人を表す言葉です。

発達障害のある子どもたちの中には、このような関係性

をもっていない子がいます。「自分には友達がいらない」と落ち込んでしまっている子どももいます。

仲がよい人とはどのような人のことなのか、親しい人とはどのような人のことをいうのか、理解できるように伝える必要があります。また、「友達」は、あなたが「この人は友達だ」と思ったら、その時点であなたの友達であり、安心して友達とっていて大丈夫であると伝えることが重要です。

仲よく

「対立することなく、協力し合って」というような意味がある言葉です。「クラスみんなで仲よく」というように使ったりします。しかし、クラスメート全員と協力することはできるかもしれませんが、対立することなく過ごすことはできません。仲よくしようとして関わりすぎてトラブルになることもあります。

また、体育の時間など、チームに分かれてゲームで勝敗を競うような場合、「クラスみんなで仲よくする」といった目標になっていると、発達障害のある子どもは「同じクラスの相手チームとどうやって協力するのか」などと考えてしまうこともあります。仲よくできなくてもよいけれど、排除するのはだめだということを教えることが必要です。

願いを込める

願いの気持ち強くもつ（強く願う）という意味を表す表現です。

発達障害がある子どもたちの場合、「願い」がイメージできないために、どこに何を込めるのかを理解できない場合があります。そのため、「願いを込めて書きましょう。」と言われても、何を書けばよいのか、わからなくなる場合があります。何がイメージできなくて困っているのかを考えることが重要です。

(〇〇が)光る

優れたことが特に際立って見えることを表す意味で使われると、発達障害のある子どもには、意味が通じないことがあります。「〇〇は毛がないから光っている」と取る子どももいます。文脈におけるその意味を丁寧に伝える必要があります。

ひたむき

「ひたむき」とは、一つのことに集中して、一生懸命であることを意味する言葉です。

一つのことに集中すること、そのことに一生懸命である

ことは、とても難しいことです。ひたむきになれないことで自分を否定的に捉えてしまわないよう、常にひたむきにできる人ばかりではないのだと伝え、安心させることも大切です。

人当たりがいい

「人当たりがいい」とは、人に与える感じや印象がよいことを意味する表現です。人当たりが柔らかい、親しみやすく話しやすい、安心感があるということです。

いっぽうで、誰に対しても「いい顔」をしているという、皮肉の意味で使われることもあります。いい意味だけではないということも含めて指導する必要があります。

朗らか

「朗らか」とは、心にこだわりがなく、晴れ晴れとして明るいさまを表す言葉です。

朗らかなほうがよいというように指導すると、性格が明るくないと感じている子どもが、自分はだめだと思ってしまうことがあるかもしれません。朗らかにできなくても大丈夫であると伝える必要があります。

真心をもって接する

「真心」は、偽りや飾り、迷いや疑いなどのない真実の心や気持ちを意味する表現です。

発達障害等があると、真実の心とは何かがイメージできない場合があります。その場合は、「真心をもって接しよう。」と言われても、どのような接し方がよいのか、わからなくなってしまいます。また、「真実」とはうそ偽りがないということですが、自分の気持ちに正直に接した結果、相手を不快にさせることもあります。真心をもって接するとはどういう行為なのかを、具体的にイメージできるように指導する必要があります。

まっすぐな人

隠し事をしたりごまかしたりせず、裏表なく正直である人、曲がったことが嫌いな真面目な人を意味します。

しかし、社会に出て大人の世界になると、だますとまではいいませんが、時としてある程度のうそやずる賢さが必要になることもあるでしょう。このことを苦手とするまっすぐな人は、場合によっては空気が読めない、「ばか正直」と思われてしまいます。まっすぐで素直な性格はよいのですが、時と場合によっては短所となることもあります。発達障害のある子どもに伝えるときには、注意が必要です。

胸が痛む

心配しているときや悲しいときなどにつらさを感じることを表しますが、実際に胸の部分が痛むときにも使われます。

発達障害のある子どもの場合、想像することが苦手であることが多いので、実際に胸が痛くなる、体の痛みのほうは理解できても、つらさを感じることを表す場合は理解ができないことがあるので注意が必要です。

胸がいっぱいになる

悲しい気持ちや大きな感動で心が満たされることを意味する表現です。

発達障害のある子どもの場合、「酸素で胸がいっぱいになる」など、具体的なことのイメージはできますが、大きな感動で心が満たされるというのは、目に見えないのでイメージがしづらく、書かれている内容を理解できない子がいることに配慮が必要です。

胸がときめく

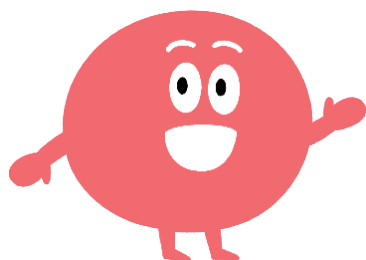
喜びや期待などで、ときどきするようなことを意味する表現です。

発達障害があるとイメージするのが苦手であることが多いので、「ときめく」という言葉の意味をイメージすることができず、喜びや期待を理解できない子どもがいることを理解しておく必要があります。

目をとがらせる

「目をとがらせる」とは、にらんだり、怒ったりしているときの表現です。

物理的に目をとがらせることはできないので、発達障害のある子どもたちには、どのような状態なのかをイメージできない場合があります。どのような目のことを表すのか、人がにらんだり、怒ったりしている写真を見せて確認するなどして、視覚的に伝える必要があります。



優しくする

相手を気遣って大事にするという意味の表現です。

発達障害のある子どもの場合、具体的な行動と関連させてしまうと、性別や年齢を考えないで、他人の手を取ってなでたり、頭をなでたりしてトラブルになることがあります。本人は、優しくしたのになぜトラブルになるのかが、理解できないことがあります。優しくするとは具体的にどのようなことなのか、子どもの生活年齢や性別等に即して指導する必要があります。

やればできる

本気で実行しようと思って取り組めば実現できることを意味する表現です。

発達障害のある子どもには、周囲のクラスメートが容易にできることでも、できないことがあります。「やればできるから」と言われて取り組んだのにできないことが続くと、行動する意欲がなくなります。また、たまたまできたときに「やればできるじゃない」と言うと、本人がたまたまできたと考えている場合、やってもできない自分を表出しづらくなるため、その行動をしなくなることもあります。いずれも、その子の気質に応じて、よく考えて使う必要があります。

よいことをする

「よいこと」とは、優れている、好ましい、望ましいなどの意味のある言葉で、「よいことをしなさい」は、それを実行することを促す表現です。

人によって「よいこと」の中身は違います。特に発達障害のある子どもの場合、主流といわれる人たちとは違った解釈をしていることがあるので、「よいこと」を具体的にどのようなことと考えているのか、確認して指導する必要があります。

よくできた

子どもの行動を評価するときによく使われる言葉です。

この言葉が悪いわけではないのですが、この言葉が頻繁に使われると、発達障害のある子どもたちの中には、評価される際によくできなければならないと考えるようになります。この場合、できているだけではだめで、「よく」できなければならないと自分を責めることになります。そのような子どもの場合には、「よくできたね」ではなく、「できたね」で評価したほうがよいこともあります。



光村図書

教授用資料

発行者 吉田直樹
発行所 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話:03-3493-2111(代表)
発行 2025年4月

光村図書ウェブサイト

光村図書 | Q

